

【報告】 2017年国際会議「太平洋無形文化遺産の保護」に参加して

紺屋あかり（お茶の水女子大学）

筆者は、2017年4月25日から27日までパラオで開催された、2017年国際会議「太平洋無形文化遺産の保護」（2017 Network Meeting for Intangible Cultural Heritage Safeguarding in the Pacific “Youth as Safeguarding Actors for Pacific ICH”）に参加した。ユネスコ（UNESCO）とユネスコの傘下にある ICHCAP（International Information and Networking Center for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region under the auspices of UNESCO）の共催で、グアム、ミクロネシア連邦、チューク、ヤップ、トンガ、フィジーなど、ミクロネシア・メラネシア・ポリネシアの各島から研究者や教育関係者らが参集した。開催地となったパラオからは、政府関係者、酋長、研究者、パラオ短期大学（Palau Community College, 以下 PCC）学生らの参加がみられた。本会議の主催国としてホスト役を務めたのは、パラオ政府芸術文化局（Bureau of Cultural and Historical preservation under the Ministry of Community and Cultural Affairs）であった。

2003年第23回ユネスコ総会において「文化遺産の意図的破壊に関するユネスコ宣言」が採択された。ICHCAPは、主にアジア・オセアニア地域の無形文化遺産保護に関わる活動拠点として、ユネスコの援助のもと2005年10月に設置された機関（本部：韓国）である。ICHCAPは、先の2003年のユネスコ総会での宣言に基づく情報収集及び活動拠点としての役割を持っており、その目的は、①アジア太平洋地域の無形文化遺産保護の実践的貢献、②地域社会と連携した活動基盤の構築、③各地域における活動普及の促進、④無形文化遺産の保護に関わる国際的・地域的協力関係の育成の4点である。本会議では「いかに若年層が無形文化の継承に積極的に参与できる活動基盤を構築するのか」というテーマが設定された。本会議はいくつかのアジアでの活動事例報告を除き、オセアニア地域における無形文化継承・保護をめぐる議論を中心とするものであった。

会議は、コロール島（*Koror*）の市街地中心部にあるパレイシアホテル（*Palaisia Hotel*）内の会議室で開かれた。エクスカーションでは、バベルダオブ島（*Babeldaob*）のマルキョク州（*Melekeok*）にある大統領府訪問、同島アイライ州（*Airai*）のバイ（*Bai*：集会所）をそれぞれ訪問した。その他、初日の歓迎会はコロール島市街地にあるペンthouseホテル（*Penthouse Hotel*）にて行われた。最終日に、マラカル島（*Malakal*）にあるパラオロイヤルリゾート（*Palau Royal Resort*）の屋外宴会場にて懇親会が催された。

開会に際しては、ユネスコ太平洋事務所の高橋暁氏（*Programme Specialist for Culture UNESCO Office for Pacific States*）から趣旨説明があった。また会議の冒頭では、パラオのマルキョクの酋長ルクライ・ラファエル・ンギラマン氏（*Reklai Raphael B. Ngirmang*）、グアム大学教授のウナイシ・ナボボ・ババ氏（*Unaisi W. Nabobo-Baba*）に

よる基調演説があった。

本会議は、3日間にわたって5つのセッションが設けられ、11のプレゼンテーションとグループセッションが行われた。セッション1 (Session 1: Country Reports) では、4名の政府関係者による各国の無形文化保護に関する取り組みが報告された (パラオ: Bureau of Cultural and Historical Preservation, Palau、ミクロネシア連邦: Historical Preservation Office, Federated States of Micronesia、フィジー: Department of Heritage of Arts, Fiji、トンガ: Ministry of International Affairs, Tonga)。たとえばパラオの報告では、文科省が取り組んでいる無形文化の著作権に関わる法整備状況などが中心課題であった。セッション2 (Session 2: Case Study) では、5名の若手研究者による活動・研究報告が行われた。発表者は、オーストラリア国立大学、パラオ教育省、NPOなどとそれぞれに異なるバックグラウンドを持っており、無形文化への多様なアプローチが垣間見られた。中でも、デニス・ラデカー氏 (Dennis Redeker) による報告は注目を集めていた。報告内容は、オンライン無形文化保護活動¹に関するもので、一次資料化に留まらない次世代の無形文化継承のあり方を提示していた。

セッション3 (Session 3: Thematic Presentation) では、グアム大学教授のウナイシ・ナボボ・ババ氏 (Unaisi W. Nabobo-Baba) が議長を務め、UNESCO と ICHCAP からそれぞれ話題提供があった。はじめに高橋暁氏が、無形文化保護に関する活動において、コミュニティ、若者が積極的に参与するモデルの構築の必要性について指摘した。次にボーヤン・チャー氏 (Boyoung Cha) からは、ICHCAP の近年の活動報告 (研究助成公募、デジタルアーカイブ資料の作成など) があった。ウナイシ・ナボボ・ババ教授の司会進行ぶりは、会場全体を圧倒させる力強いものであったと同時に、島由来の陽気さをも感じさせた。そのため、「消滅しつつある無形文化」というセンシティブな課題を目前に置きながらも、皆が前向きに議論できる場となっていた。会議に参加する全員がそれぞれ活発に発言し、オブザーバーとして参加していた PCC の学生らが意見を述べる場面も見られた。筆者は「私は社会活動家になってコミュニティと共同しながら次世代にパラオの言葉を伝えたい」という学生の発言に強い衝撃と感銘を受けた。

セッション4 (Session 4: Group Discussion) では、A、B ふたつのグループに分かれ、”Developing Pacific Youth Network” をテーマにそれぞれのグループが議論した。

1. Who will be the target? 2. What is the first step for developing network? 3. What aspect of this network will benefit youth ICH practitioner? 4. What kind of national support is necessary?

¹ デニス・ラデカー氏が他3名の研究者らと共同で実施するプロジェクトは、The Ark Project と名付けられ、現在パラオを中心に活動がすすめられている。ユネスコからのサポートを得た NPO で、オンライン無形文化保護活動 (Safeguarding ICH online) をはじめ、島の文化や環境保護が活動の中心となっている。活動内容については、専用の web ページが設けられており、閲覧できる (<http://www.islandarkproject.org>、2017年6月29日最終閲覧)。

などの質問に対して議論し、各グループが回答を発表した（写真1）。グループAは、太平洋地域における教育のコンセプトとして、ココナツを象徴として、「大地に根を張り（祖先・知識の継承者）ココナツを实らせる（若者・被継承者）」という役割分担のもと、コミュニティを基礎とする継承経路を保持することの重要性を訴えた。グループBは、現実的にまずは話し合いの場を設ける必要があることを指摘し、若者が今何を求め・考えているのかを知ることが活動の第一歩であるとした。筆者はセッションBに参加したが、特に関心を持ったのは、継承活動においてオセアニア全域に一貫する姿勢が求められるという意見であった。ここでいう一貫性とは、継承活動におけるジェネラルな手法を指すのではなく、問題にいかに取り組むのかといったオセアニア全域で共有可能なスローガンにかかるものであった。このように、それぞれの島嶼世界に生きながら、政治や文化の壁を超えた活動への姿勢を求める声が多く聞かれたことが非常に印象的であった。セッション4終了後には、ICH Online Exhibition at Google Cultural Institute と題されたデジタルアーカイブ作品のお披露目会が開かれた（写真2）。披露する段になってもインターネット環境が整わないという、「島ならでは」のアクシデントもあったが、最終的にはスクリーン上に鮮明な写真素材が映し出され、参加者は興味深く見入っていた。



写真1 パレイシアホテルでの2日目の会議風景（筆者撮影）

会議3日目に設けられたセッション5（Session 5: Adopt Outcome Document and Way Forward）は、エクスカーション先のマルキョク州の大統領府内の会議室にて実施された。会議の締めくくりとしてICHCAPによる今後の事業内容について説明があり、今後も太平洋地域関係者間及び、UNESCO、ICHCAPとの継続的な連携関係の構築を目指すとして、閉会した。最終日の懇親会（写真3）は終始和やかな雰囲気、参加者全

員が歓談を楽しんでいる様子が見られた。パラオの子供達によってチャントや踊りが披露されたことを封切りに、参加者らが次々と島の歌や踊りを披露する場面も見られた。会議・懇親会共に、アイランダースピリット溢れる盛り上がりを見せていた。

オセアニアにおけるユネスコ無形文化遺産登録数は、2017年6月時点で2件²と、世界の他地域と比較して非常に少なく、今後の展開が大いに期待されている。筆者は、オセアニア各地から参集した研究者らと3日間を過ごす中で、無形文化の継承という課題に対する各島の個別性を尊重しながらも、オセアニアらしい手法が見出されることへの期待感を覚えた。筆者自身も、パラオの口頭伝承のアーカイブにかかわる共同研究を通して、地域社会とともに上記課題について検討を続けていきたい。



写真2 会議2日目に開催された ICH Online Exhibition の様子（筆者撮影）



写真3 最終日の懇親会会場（筆者撮影）

² オセアニアのユネスコ無形文化遺産は、いずれも2008年に登録されたバヌアツの砂絵（Vanuatu sand drawings）とトンガのラカラカ（Lakalaka, dance and sung speeches of Tonga）の合計2件である（<https://ich.unesco.org>、2017年6月29日最終閲覧）。